

石狩市内の神社分布(3)【浜益区】

Distribution of shrines in Ishikari City, Hokkaido, Japan (3)

【Hamamasu region】

坂本 恵衣^{*}

Kei SAKAMOTO^{*}

要 旨

北海道では和人が流入、定住する中で小祠・神社の創立が行われた。本文では北海道神社庁誌記載の神社を中心に、石狩市の内特に浜益区について地域の特徴と神社分布との関連について注目した。結果として浜益区では創立された時代・祭神に着目すると、場所が置かれた沿岸部、開拓移民によって農村が開かれた内陸部では差異が見られる等共通点があった。一方で、2地域との大きな違いとして浜益には荘内藩の存在があり、荘内藩に由来を持つ神社も存在し、浜益独自の傾向も確認された。

キーワード：神社、浜益区、ハママンケ、漁村地域、農村地域

1. はじめに

北海道は江戸時代から明治時代(以下、開拓期)にかけて和人が流入し、定住及び現在の文化が定着していった背景があり、神社も幕末以降に形成されたものが多い。各神社の創立には移民の出身地での信仰や、開拓期の環境が関係していると推測される。本文では石狩市における神社分布と地域的な特色との関係について考察する。

なお、石狩市は旧石狩市域、厚田区(旧厚田村)、浜益区(旧浜益村)で形成されるが、地区ごとに和人の移入した経緯や街の形成過程に差異があるため、3地区それぞれ限定して調査を行う。

坂本(2024；2025)は旧石狩市域・厚田区を調査した結果、石狩市域においては沿岸部(漁村部)と内陸部(農村部)では創立の時期や経緯やその祭神等に差異が見られ、厚田区では沿岸部と内陸部で差異は見られるものの、内陸部については情

報が不足しており、地域の特徴を把握するには継続調査の必要性が生じた。本文では2地域に続き、浜益区について調査した。

2. 浜益区について

石狩市は南を札幌市に隣接し、西側一帯が日本海に面する街である。旧石狩市、厚田村、浜益村が2005(平成17)年に合併し現在の石狩市となった。

石狩市浜益区は石狩市の北部に位置する地域である。浜益区浜益(以降、個別の地名を示す場合、「浜益区」を省略、ただし浜益区浜益については広域を示す浜益との区別のため旧名である「茂生」を用いる)等の地名で整備されたのは明治に入ってからのことである。

浜益地域は1706(宝永3)年に松前藩がマシケ場所を設け、鯺漁業を始めたことが和人の定

^{*} いしかり砂丘の風資料館 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

住と鯨漁の始まりとされる。その後、場所の経営は場所請負人が請け負うようになり、その後1785(天明5)年にマシケ場所がマシケ場所(現在の雄冬から留萌)とハママシケ場所(現在の毘砂別から雄冬)とに二分され、このハママシケ場所の地域が後の浜益となった。1807(文化4)年にはハママシケ場所が幕府直轄となり、その後松前藩に復領、1855(安政2)年に、再び幕府直轄地となった。1859(安政6)年に幕府が荘内藩にハママシケ場所の警備と経営を命じると、荘内藩は警備とともに農業移民も募集し開拓に力を注ぎ、幕府の役人等ではない一般人がハママシケに住むようになったのはこの時期である。しかし、1868(慶応4)年に幕府崩壊と共に全員が引き上げた。

その後、1869(明治2)年に名称がハママシケから浜益と改称され、開拓使出張所が開設、茂生に詰所が設立された。1871(明治4)年には村名(群別、雄冬、川下、尻苗、柏木、清水、実田)が選定され、1872(明治5)年に浜益出張所とは別に茂生に戸長役場が置かれ浜益郡(浜益区、黄金区、後に区から村となる)として管理されるようになった。

沿岸部一体は江戸時代から漁業(特にニシン漁)で栄え、1907(明治40)年の一級町村制施行時には浜益村と黄金村が合併し浜益郡浜益村となり、

その頃の人口は約6,000人で鯨漁も隆盛を極めていたとされる。成り立ちからもわかるように大部分が漁村地域となっていた一方で、開拓使の移民奨励政策によって、多数の移民があり、一部地域においては農業のほか果樹園の経営等が推進された。その後、鯨の漁獲量の大幅な変動がありつつも一時は人口9,000人台に達するほど賑わった。しかし、1955(昭和30)年に鯨が獲れなくなると人口も減少していった。

そして2005(平成17)年に石狩市・浜益村と合併し現在の石狩市浜益区となった(いしかり砂丘の風資料館編, 2006; 2007; 2008; 2018; 石橋 源編著, 1980; 吉田・石橋, 1971)。

3. 各地域の移民の流入時期と生業

前述のとおり、浜益区は沿岸地域において江戸時代に場所経営がなされ、鯨漁業を中心に集落が形成され、それを追う形で農村部の開拓が推進された(表1)。ほとんどの地域において江戸時代には一度和人が来たことがわかっている一方、「ハママシケ場所」という現在の浜益区全域をさした記録も多いほか、管理(経営)形態の移り変わりもあり、個別の地域については正式な開村時期等が定かでないものもあった。

表1. 浜益区における開拓移民の代表的な移住時期と生業

地域	出身地	時期	主な生業, 事業
浜益(全域) (茂生ほか)	-	1706(宝永3)年 1785(天明5)年	場所経営・漁業
川下 (毘砂別含)	荘内	1859(安政6)年頃	陣屋経営
柏木	-	1864(元治元)年	農業
実田	-	1862(文久2)年	農業
黄金	-	1864(元治元)年	農業
幌	-	1796(寛政8)年頃	番屋の設置(漁業)

(石橋編, 1980より)

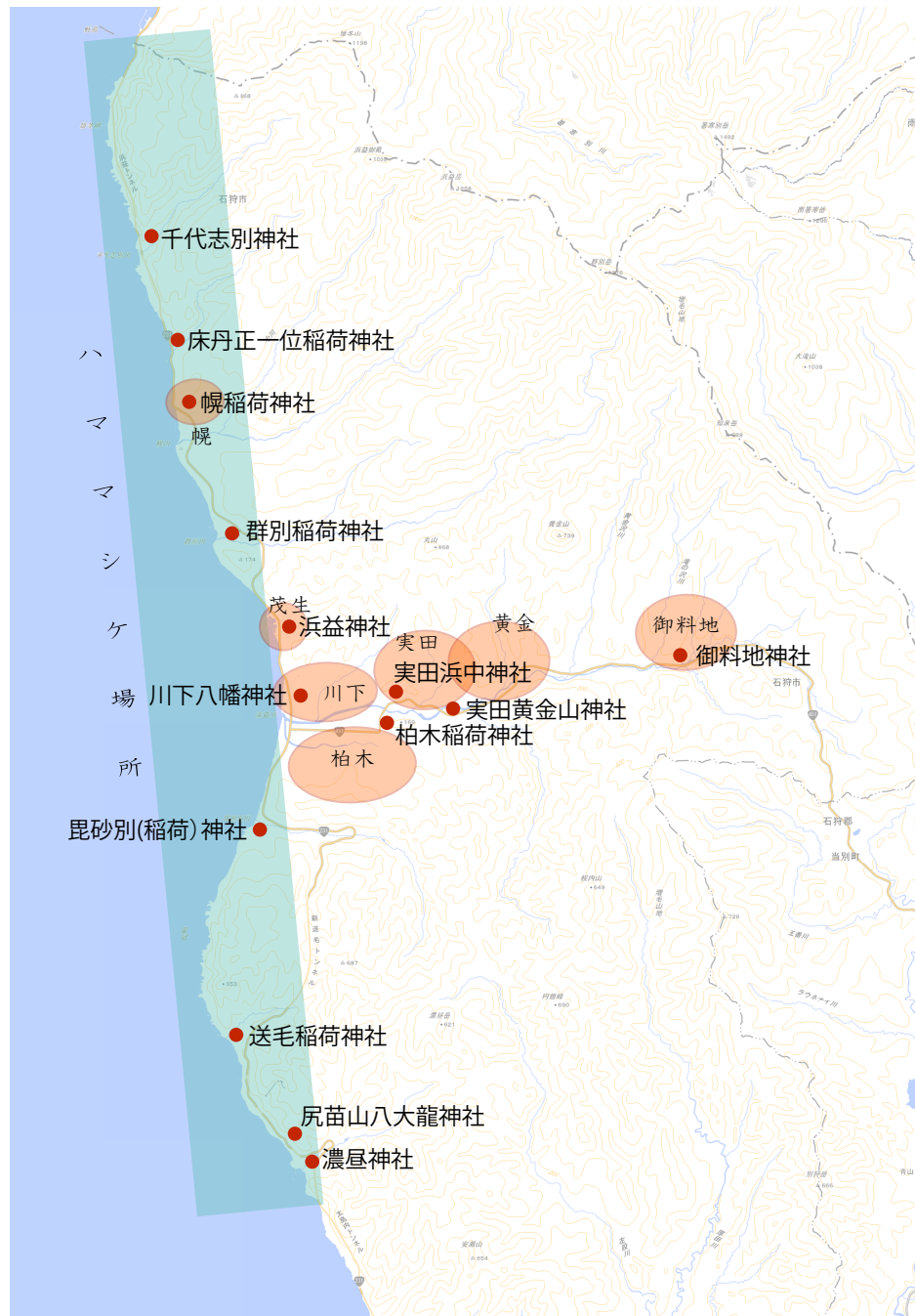


図1. 移民の流入場所の一例と神社分布 (国土地理院地図に加筆)
 ※地図は現在のものを使用し、所在地についてはおおまかな場所を示した。
 所在地が不明なものは地図には記載せず、表に地名のみ記載した。

4. 神社の分布について

今回取り上げた旧石狩市域の神社は「北海道神社庁誌 (同編集委員会編, 1999)」に記載され、公的に登録されたもの、及び「石狩の碑 (同浜益区編調査編集委員会編, 2012)」に記載され、地

図上で位置が確認できたものを対象とした。資料への掲載はないが現在も社殿が残っている神社については位置図 (図1) 及び一覧 (表2) にのみ記載し、創立の時期の比較からは除外した。

表2. 浜益区の神社一覧

名称	場所	創立年	祭神	旧社格
1 浜益神社	(浜益区浜益 227 番地)	天保年間	保食神 市岐島姫命	郷社
2 群別稲荷神社	浜益区群別村 1 番地	1854 (安政元) 年か	保食神	村社
3 川下八幡神社	(浜益区川下村 35 番地)	1862 (文久 2) 年	誉田別尊	村社
4 幌稲荷神社	(浜益区幌 1200 番地)	1885 (明治 18) 年	稲荷大神	村社
5 濃昼神社 (濃昼八幡神社か)	(浜益区濃昼)	不詳	稲荷大神	-
6 送毛稲荷神社	浜益区送毛 (浜益区送毛 34 番地 13)	1843 (天保 14) 年	正一位稲荷大明神	村社
7 尻苗山八大龍神(社)	浜益区送毛 (浜益区尻苗 36 番地 2 地先)	明治時代	八大龍神	-
8 毘砂別(稲荷) 神社	(浜益区毘砂別 303)	江戸時代か	正一位稲荷大神璽	-
9 柏木稲荷神社 (正一位稲荷神社か)	(浜益区柏木 215 番地)	1862 (文久 2) 年	保食神(稲倉魂命)	-
10 実田黄金山神社 (黄金山神社か)	(浜益区実田 129 - 2)	1863 (文久 3) 年	鳥海山大物忌神社? 稲荷社?	-
11 御料地神社	浜益区御料地 (浜益区御料地 389 番地 1)	明治 30 年前後か	天照大神	-
12 千代志別神社	(浜益区千代志別 595-15)	不詳	正一位稲荷大神	-
13 於布居神社	(浜益区雄冬)	安政年間	大物主命 崇徳天皇	-
14 床丹正一位稲荷神社	(石狩市浜益区床丹)	不詳	保食神	-
15 実田浜中神社	石狩市浜益区実田	不詳	天照皇大神	-

(北海道神社庁誌編輯委員会編(以下, 神社庁編), 1999 ;
石狩の碑厚田区編調査編集委員会(以下, 石狩の碑編), 2015 より)

※記録と地図等で複数の名称が確認されるものは地図の名称に加え, 記録上の名称を () 内に記載した.

※現在地が確認できるものは地図上の住所を記載し, () 内は記録上の住所である.

※網掛けは地図等で確認できないもの.

※下線は地図上には記載があるが, 情報が不詳なもの.

(1) 各神社について

各神社の基本情報については表 2 の通りであるが、文献に記録のある神社の概要及び引用文献を下記に示す。⑭床丹正一位稲荷神社、⑮実田浜中神社については資料に記載がない。

①浜益神社

「浜益村茂生に建立された稲荷神社は天保年間には現在の浜益高校校庭にあった。1875(明治 8)年に開拓使はこの社を郷社に昇格させ浜益神社と称し、例祭日を 7 月 15 日と定める。例祭日は村民一般の休日となり御神輿は北は雄冬、南は濃屋まで海上渡御を行い氏子は海浜に迎え現在も参拝している。」

(石狩の碑編, 2015; 神社庁編, 1999; 北海道神社庁 HP——浜益神社)

②群別稲荷神社

「安政元年、ハママシケ運上家のホンクンベツ番屋番人、今伊六が奉斎したことに始まる。当時は伊六稲荷と称していたという。当初はホンクンベツ番屋の北側の南向斜面山腹を整地して社を建立、80 段の石段を設けていた。1905(明治 38)年に地域住民の寄附により社殿を改築、毎年の鯉漁の時期には大漁祈願祭で連日賑わいをみせていた。1913(大正 2)年 12 月 28 日、村社に列せられるが、1955(昭和 30)年以降、鯉も姿を消し漁場は荒廃した。この後、集落は奥地へと発展したため、1969(昭和 44)年に現在地に奉遷された。」(石狩の碑編, 2015; 神社庁編, 1999; 北海道神社庁 HP——群別稲荷神社)

③川下八幡神社

「1848(嘉永 1862(文久 2)年 12 月、庄内藩がハママシケを支配するために川下に陣屋を設け、屋敷内に八幡神社を建立したことに始まる。翌年の 7 月 15 日、荘内より御分霊を頂き奉斎した。その後、庄内藩の陣屋引き揚げにともない荒廃したが、地域住民によって陣屋の門外に奉遷され祀

られた。1913(大正 2)年 12 月 28 日、村社に列せられる。」

(石狩の碑編, 2015; 神社庁編, 1999; 北海道神社庁 HP——群別稲荷神社)

④幌稲荷神社

「1885(明治 18)年、三上勝太郎等によって創建された。2001(平成 13)年 7 月 10 日新社殿造営。」

(石狩の碑編, 2015; 神社庁編, 1999; 北海道神社庁 HP——幌稲荷神社)

⑤濃屋神社(濃屋八幡神社か)

(石狩の碑編, 2015; 神社庁編, 1999)

⑥送毛稲荷神社

(石狩の碑編, 2015; 神社庁編, 1999)

⑦尻苗山八大龍神(社)

(石狩の碑編, 2015)

⑧毘砂別(稲荷)神社

(石狩の碑編, 2015; 神社庁編, 1999)

⑨柏木稲荷神社(正一位稲荷神社か)

(石狩の碑編, 2015; 神社庁編, 1999)

⑩実田黄金山神社(黄金山神社か)

(石狩の碑編, 2015; 神社庁編, 1999)

⑪御料地神社

(石狩の碑編, 2015; 神社庁編, 1999)

⑫千代志別神社

(石狩の碑編, 2015; 神社庁編, 1999)

⑬於布居神社

(石狩の碑編, 2015; 神社庁編, 1999)

(2) 各地域の特色と神社の傾向

①神社の創立時期

浜益地域の神社の多くは江戸時代の場所時代・
 荘内藩時代に創立されている(表3)。また「浜益」
 「幌」の区分については時代によって地域全域
 を指し、個別の村名での記録が確認できないもの
 もあり、表3においては区分上は属しているとさ
 れた地域区分に表記する。また、柏木については

創立時期よりも移入時期が早いように見えるが、
 実際には開墾時期との比較となっており、移入時
 期が定かでないため今回の時代による比較からは
 除外した。

そのため、対象とする地域の移入時期と神社の
 創立年を比較すると、いずれも創立年が後になっ
 ており、和人の流入後に創立されたものであるこ
 とを示している。

表3. 各地域への移住時期と神社の創立年と由来

地域と移入時期	神社と創立年	由来など
浜益(茂生その他) 1706(宝永3)年 1785(天明5)年	浜益神社 天保年間	創立者(経営者)由来
	送毛稲荷神社 1843(天保14)年	祭神か
	尻苗山八大龍神(社) 明治時代	地域の伝承由来
川下(毘砂別含) 1859(安政6)年頃	川下八幡神社 1862(文久2)年	創立者(経営者)由来
	毘砂別(稲荷)神社 江戸時代か	祭神か
柏木 1864(元治元)年以前	柏木稲荷神社 1862(文久2)年	祭神か
	実田黄金山神社(黄金山神社か) 1863(文久3)年	地域の住民(移民)由来か
実田 1862(文久2)年以前		
黄金 1864(元治元)年以前	御料地神社 明治30年前後か	祭神か
幌 1796(寛政8)年頃	群別稲荷神社 1854(安政元)年か	祭神か
	幌稲荷神社 1885(明治18)年	創立者(経営者)由来・祭神 か

※所在地がわかるものは該当地域、あとから行政区画として整理が行われた地域はハマ
 マシケ場所時代の地域に属した。

※網掛けは、浜益域内であるが、「茂生」には属していないもの。

※下線は移入時期ではなく開墾時期を記載している。

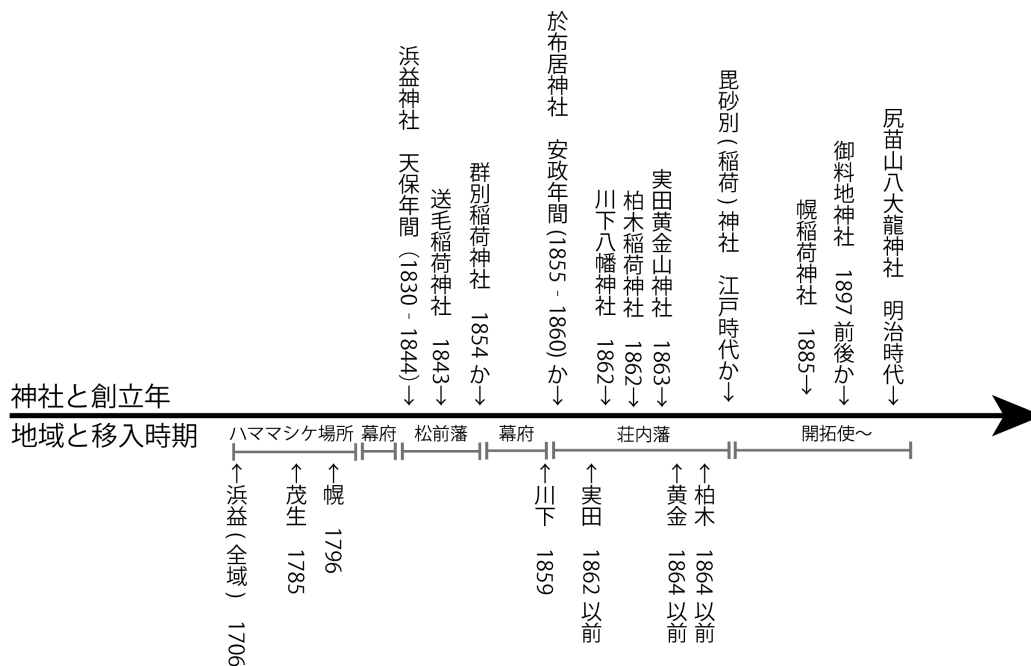


図2. 各地域への移住時期と神社の創立年比較図

②生業との関連性

神社の創立の由来として考えられるものとして、浜益区では大きく分けて次の4つの傾向がみられた。

- 創立者 (管理者) 由来のもの
- 地域の伝承由来のもの
- 地域の住民 (移民) 由来と考えられるもの
- 祭神や特定の神社由来と考えられるもの

傾向 a については特に当時の経営者、現地の管理者の拠点がおかれた地域が該当する。浜益はハマシケ場所、川下はハマシケ陣屋である。傾向 b は地域で語り継がれる民話が由来とされている神社のことを示す (漁師に関わる内容)。そして傾向 c については神社の詳細については明らかな部分が多いが、祭神等として伝えられている鳥海山大物忌神社が山形県のもので、創立時期も荘内藩が警備・経営にあたっていた時期であり、同地域からの移民が祀ったものとも考えられる。最後に傾向 d は3社が稲荷神・保食神 (稲倉魂命)、1社が大物主命を祀っており、豊穰及び開拓の神

として一般に広く祀られており、地域の性質にも合致するものである。

なお、浜益・幌の区分に属する神社は異なる傾向が存在しているが、前述のとおり区分上統合しているが、地理的には一定の距離があるため、今回矛盾点とは考えないものとする。

そのため、いずれの地域においても由来は創立者 (経営者)、伝承、移民、祭神と差異は見られるものの、生業との矛盾は見られない。浜益区における神社の多くが和人の流入後に各地域における生業、事業、開拓のために祀られたものであり、地域の文化的背景や生活・生業が神社の形成や信仰に反映されていることがわかる。

5. おわりに

本文では浜益地域という石狩市の中でも一部地域に限定して神社分布について考察した。

石狩市域については2023年度・2024年度の調査を含め全域について言及したが、条件にあて

はまる一部神社のみを対象とした。今後は今回対象外とした祠や寺社を含め全域の調査を進めていくことで、北海道の沿岸地域に見られる神社分布の傾向を示すことができると考えられる。

引用文献

- 平凡社地方資料センター編, 2003. 北海道の地名, 日本歴史地名大系第一巻, 1660P., 平凡社.
- 北海道神社庁誌編輯委員会編, 1999. 北海道神社庁誌. PP. 264-278 ; 815-817, 北海道神社庁.
- 石橋 源編著, 1980, 浜益村史, PP. 189-435, 浜益郡浜益村役場
- 石狩の碑浜益区編調査編集委員会, 2015. 石狩の碑 第5輯 浜益区編, 201P., 石狩市郷土研究会.
- いしかり砂丘の風資料館編, 2006・2007・2008・2018, いしかりファイル. 54, 79, 85, 93, いしかり砂丘の風資料館.
- 坂本恵衣, 2024, 石狩市内の神社分布 (1)【旧石狩市域】, いしかり砂丘の風資料館, 14 : 7-14.
- 坂本衣, 2025, 石狩市内の神社分布 (2)【厚田地域】, いしかり砂丘の風資料館 : 25-32.
- 吉田寿人・石橋源編著, 1971, 浜益村小史, PP. 5-46, 北海道浜益郡浜益村役場

北海道神社庁 HP. <https://hokkaidojinjacho.jp/> (最終閲覧日: 2025年12月29日)

浜益神社 <https://hokkaidojinjacho.jp/> 浜益神社 /

群別稲荷神社 <https://hokkaidojinjacho.jp/> 群別稲荷神社 /

川下八幡神社 <https://hokkaidojinjacho.jp/> 川下八幡神社 /

幌稲荷神社 <https://hokkaidojinjacho.jp/> 幌稲荷神社 /